



特集 アスリート in SFC

連載

● 新のぞき見ルーティン _____ 牛山 潤一
When I was young _____ アルマンスール・アフマド
贈る言葉 _____ 今井 むつみ、大堀 壽夫、國領 二郎、中村 修、長谷部 葉子、増井 俊之
わたしの推薦図書 _____ 中西 泰人

KEIO SFC REVIEW

TABLE OF CONTENTS

No. **79**

特集

02 アスリート in SFC

04 アスリート in SFC [CASE 1]

尾崎 野乃香 (総合政策学部4年)

野中 葉 (総合政策学部准教授)

08 アスリート in SFC [CASE 2]

豊田 兼 (環境情報学部4年)

仰木 裕嗣 (政策・メディア研究科教授)

12 フェンサー in SFC

飯村 一輝 (総合政策学部3年)

千田 健太 (総合政策学部専任講師)

桑原 武夫 (総合政策学部教授)

16 コーチ in SFC

水鳥 寿思 (総合政策学部准教授)

東海林 祐子 (政策・メディア研究科准教授)

連載

20 **新**のぞき見ルーティン

No.1 牛山 潤一 (環境情報学部教授)

22 When I was young

No.55 アルマンスール・アフマド (総合政策学部訪問講師 (招聘))

26 SFC万学博覧会取材記

29 寄稿 贈る言葉

No. 14 今井 むつみ / No. 15 大堀 壽夫 / No. 16 國領 二郎

No. 17 中村 修 / No. 18 長谷部 葉子 / No. 19 増井 俊之

36 寄稿 わたしの推薦図書

No.15 中西 泰人 (環境情報学部教授)

38 追想 阿川先生にボーフレ

土屋 大洋 (常任理事 / 政策・メディア研究科教授)

40 編集後記

アスリート in SFC

p.4

アスリート in SFC [CASE 1]

尾崎 野乃香 × 野中 葉



p.8

アスリート in SFC [CASE 2]

豊田 兼 × 仰木 裕嗣

フェンサー in SFC

p.12

飯村 一輝 × 千田 健太 × 桑原 武夫

2024年夏に開催されたパリオリンピック・パラリンピックでも、多くのSFC関係者が活躍した。選手として出場した現役生は3人いる。彼らは、競技に取り組む一方で、SFCでどのような学生生活を送っているだろう。また、SFCのスポーツ分野の研究とその研究者たちは、多種多様な関心を持つ人が集まるこのキャンパスにどのような影響を与えているだろう。本特集ではSFCで研究に取り組むアスリートたちの姿を探っていききたい。

p.16

コ - 子 in SFC

水鳥 寿思 × 東海林 祐子

アスリート in SFC

[CASE 1]

野中葉 尾崎 野乃香



パリ 2024 オリンピックのレスリング女子 68kg 級で銅メダルを獲得した尾崎野乃香さんは、多忙な選手生活を送る一方で、野中葉研究会 2 (ムスリム共生プロジェクト) でムスリムに関わる研究をしている。SFCでの学生生活と選手生活の両立から生まれる学びについて、SFCの卒業生でもある野中葉先生と尾崎さんにお話を伺った。

●野中研究会との出会い
野中葉研究会(以下、野中研)のムスリム共生プロジェクトではどのような活動をしていますか。

野中葉先生(以下、野中) イスラムやムスリム(イスラーム教徒)という言葉 키워ドに、異なる宗教や文化を持つ人たちが士がより良く生きていくためにはどうしたら良いかということを考えて活動しています。具体的には、日本でのムスリムのネットワーク

を広げたり、自分たちでもイスラームに

関する知識を深めたりしながら、日本社会に対しイスラームについて発信していくプロジェクトを行っています。

——尾崎さんが野中研に所属した理由は何ですか。

尾崎野乃香さん(以下、尾崎) 入学時は、レスリングに繋がるこ

づいたことや変化したことはありませんか。

尾崎 私は外国の選手と関わる事が多く、いろいろな人と話すので、「人それぞれ違って当たり前」という考えを持っています。しかし、日本では、イスラームに対する理解がまだ十分に浸透していないように感じます。友達にイスラームの話をする時、怪訝な目で見られてしまうことも少なくありません。

研究会に入る前は、大会に出場しても、ただ外国の人と試合するだけでしたが、イスラームの勉強をした後は、宗教の違いにも関心

を持つてみんなと接するようになりまし。この人たちは試合前に

神にお祈りしているとか、選手の様々なルーティンにも目が向くようになりまし。私は神に祈ることはせず、自分の今までの過程に自信を持って試合に臨みます

が、彼らにはそれに加えて、何か私には分からない自信の持ち方がきつとあるんだらうなと考えることもありまし。今は、宗教にかかわらず、人と接する時に一人一人考え方も信念も違うことを受け入れなければならぬというふう

を知りまし。

——野中先生が尾崎さんとの交流を通して気づいたことはありますか。

野中 先日の研究会で、ムスリマ(女性のイスラーム教徒)とスポーツがチームの論文の輪読をし、野乃香さんが発表を担当しまし。世界的な流れを見ても、例えば女性の体操選手やビーチバレー選手は露出が少ないウェアに変える動きがありまし。ムスリマの服装からもう少し広げて、女性アスリートの服装が今後も現行のデザインのま

とを学ぼうと
考え、スポーツや心理学の授業を履修してまし。一方で、レスリングを通じていろいろな国の人たちと交流することが増えまし。世界大会でムスリムがお祈りしている姿を見たり、競技中は肌を見せている選手が普段はヴェールを被って生活していることをSNSで知ったりすることがありまし。私はそれまでの生活でムスリムと関わる機会がありまし。

せんでしたが、そうした選手たちの様子に急に興味を覚えるようになりまし。そこで、野中先生の「イスラームと現代社会」という科目を履修し、イスラームの考え方を学びまし。この授業を通して、私は今まで何も知らなかつたなど思ったことがきっかけで、野中先生の研究会にも入ろうと決めまし。

●異なる視点から生まれる発見
——尾崎さんが研究会に入って気

まで良いのかということはいろいろな形で議論されるべきなんじゃないか。論文を読んだ後の議論では、こういう話になりました。輪読文献はメンバーの関心によって私が選ぶのですが、野乃香さんがそのような視点を持ってきてくれたことで、私や研究会のメンバーも新しいことを考えるきっかけになりました。野乃香さんがいなかったら、おそらくこのトピックは扱わなかつたはずで。野乃香さんに限らず、研究会のメンバーそれぞれの関心によって、教員や学生がお互いに学び合うことができています。



●多様な関心が創造を生む
——尾崎さんがSFCへの入学を決めた経緯を教えてください。また、お二人はSFCの風土についてどう考えていますか。

尾崎 私のように幼い頃からスポーツに励んでいる人は、大学も強豪校に入るのが一般的です。レスリングでオリンピック出場することを目指して慶應義塾に入學した人は今までいませんでした。私は周囲に反対されていました。自分が決めたということでも押し通して入りました。

慶應に入學したのは、レスリングだけの学生生活にたくなかったからです。レスリングだけを視野に入れて、レスリングだけに励んで強くなるということがオリンピックへの一番の近道かもしれない。でも私は、レスリングだけで

はない他のものを見つけないという思いを持って入學しました。SFCには、研究をしている人もいれば、起業している人もいます。それぞれ関心が違う人たちが集まっているので、SFCに入れば、きっと自分の視野も広がるはずですよ。

それに、入學してみると、様々な分野で活躍する人と関わるにつれて、レスリングに固執してないところが私の良い点であると気づきました。こだわりすぎているからこそ、競技にもより一層熱を入られたように思います。レスリングだけににならないからこそ幅広く学ぶことの大切さを感じています。

野中 いろいろな人がいれば、予期しない化学変化みたいなものがそこから生まれる。その様子を

ページをお願いします。

尾崎 まずは四年後もオリンピックに出て、金メダルを取りたいと思っています。日本の女子レスリング選手の中に、ムスリムや女性の社会進出などの問題に関心がある選手は、まだ今のところいないようです。私は、そのような問題についても、誰かの役に立ちたいと考えています。大学を卒業した後、SFCで学んだことを積極的に活かしていきたいですね。

このインタビューを読んでも、いろいろな方々の中には、これから何をすれば良いかわからない人もたくさんいるかもしれません。SFCで生活していると、興味が湧く分野にきつと出会えるはずですよ。様々な分野の授業が開講されているのもSFCの特徴です。いろいろ

ろな分野の事柄に触れて、自分の関心や興味を広げられるのは、SFCに在ることの強みですね。

野中 SFCには、際立っていないけれども変な都市伝説のようなものがあるような気がします。でもみんながみんな目立つ人ばかりだったら、おそらくその組織は回っていかないと、いろいろな人がいるいろいろなふうな役割を持つことになって、今まで考えたこともなかった相乗効果が生まれてくるはずですよ。

SFCには、高校時代から様々な活動をして入學する人もい

ば、そのようなことは特になく、コツコツ勉強してたどり着いた人もいて、それぞれの役割や良いところを伸ばせます。そこそこのSFCという場所ですから、気後れしないで大丈夫だよと伝えたいです。

(構成…東史華)

野中 葉 (のなか・よう)

総合政策学部准教授。
専門は、現代東南アジア研究(特にインドネシア)、現代社会と宗教、女性とイスラーム、マレー・インドネシア語教育。

尾崎 野乃香 (おざき・ののか)

総合政策学部 4年

野中研の学生たち



研究会にメダルを持参し、報告する尾崎さん

アスリート in SFC

[CASE 2]

豊田 兼
仰木 裕嗣



豊田兼さんは、110mハードルと400mハードルでパリ2024オリンピックに出場したアスリートであると同時に、仰木裕嗣研究会（以下、仰木研）で卒業プロジェクトに取り組む4年生でもある。スポーツ工学とスポーツバイオメカニクスを専門とする仰木先生もまた、博士課程の時まで現役の水泳選手であった。今回はこのお二人に、競技と研究の関係などを伺った。

●仰木研での学び

豊田さんは仰木研でどのようなことに取り組んでいらっしゃいますか。

バランスや動きの補償がどのような

になっているかということを検証しています。この実験では、

や、仰木研ならではの特徴は何でしょうか。

—仰木研に所属して感じたメリット

操のトランポリンや自転車のハードル操作など、異なる競技の運動原理を学びました。他のスポーツとの共通点や相違点を見つけないと、自分の競技に新たな視点を加えることができていると感じます。

豊田兼さん（以下、豊田）卒業プロジェクトとして、ハードル走における空中動作の分析に取り組んでいます。110mハードルと400mハードルでは、ハードルの高さも間隔も違います。この二つのハードル競技での跳ぶ動作を比較し、空中での

両方のハードル競技の選手に参加してもらってデータを取ることで、二つの競技での違いを見出すことを目指しています。私は110mハードルも400mハードルも跳ぶ珍しいタイプなので、自分自身、被験者にもなりました。

豊田 仰木研には様々な競技の選手が所属しており、それぞれの経験や知識を交換することができず。水泳や陸上、体操など、異なるスポーツでも共通する学びがあるハードル動作だけでなく、体

—印象的だった授業はありますか。

豊田 小俣貴宣先生（環境情報学部非常勤講師）の、フィールド

ワークに行って実社会の事象を認知科学の観点から考察する「応用認知科学」が好きです。また、仰木先生の「身体運動解析」の授業を受けたことは、仰木研で学ぶ内容が楽しいと思うきっかけになりました。

の長期休暇中に開講される科目。以下、特プロ）も、とても面白かったです。

仰木 特プロでは、「スポーツ用具開発の探求」というテーマ

仰木裕嗣先生（以下、仰木）私の授業では、動作解析のための動画の撮り方や高速カメラの使い方から教えるようにしています。

豊田 そこで学んだことが、普段のデータ収集にとっても役立っています。それから、仰木研での特別研究プロジェクト（夏季、春季

で研究をしています。私はオリンピック・パラリンピックの仕事に没頭していた時期が長かったこともあり、多くのスポーツ関連企業との繋がりがあります。その中でも二〇二二年度はスポーツに関わる繊維製品、木工製品などを製造する企業を見学させてもらえることになり、学生を連れて富山県まで行きました。

●学業と競技の関係
—豊田さんは学業と競技練習をどのように両立させているのでしょうか。

豊田 私は、シーズン中であれば週に五日、体育会競走部の練習に行っています。陸上競技は、他の競技に比べて練習時間が短く、長くても二、三時間で終わります。平日は午前から昼までSFCで授業を受けた後、日吉へ移動して夕方に練習をすることが多いです。

—授業や仰木研で学んだことと競技が繋がると感じることはありませんか。

豊田 ありますね。スポーツ選手には感覚で競技をしている人が多いようですが、仰木研では、数値化したものを感覚に落とし込むという逆の手法が使われています。この手法が、私にとって道しるべになっています。そういう意味で、仰木研での活動が競技に繋がったと、やはり思います。反対に、競技活動が学業に良い影響を与えてくれたこともあります。オフシーズンの冬季の間は、競走部で自分の動きについての勉強会が開かれますが、そこで学んだことがきっかけで興味分野が広がりました。人間の動きについて関心が湧き始めて、SFCでもそういう分



研究のためにデータを収集する様子

野を学べる授業を履修しました。このような学びが、自分の競技に直結することもあれば、新しいことかもしれませんが、いずれにしても、何かしらのアイデアを得ることがよくあります。

豊田さんは、競技以外のコミュニティにも、積極的に参加していらっしやるそうですね。

豊田 競走部の中にも、陸上一本でやっている人はそれなりにいますが、私の場合、それだと少し不安になることがあります。怪我やメンタルの浮き沈みなどのせいで競技に集中できなくなった時のためにも、別のものに熱中できるコミュニティに加わっています。人にはそれぞれのスタイルがありますが、私は陸上以外にもいろいろなことをやるのが楽しいなと思っています。

●スポーツ科学の挑戦と研究
先生の立場から、アスリートの学生と関わることで気づいたことや、お互いに学び教え合う「半学半教」の精神を感じることはありますか。

仰木 ありますね。豊田君の卒業プロジェクトのテーマは補償動作です。これは教員の私から見ても掘り下げるテーマです。補償動作の説明を少しすると、例えば、速い選手が走っているのを見ると、太ももがビュッと上がっていますよね。速い人たちの太ももが上がっているから、昔から指導者はもも上げの練習を推奨してきました。けれども、それは間違いなんです。太ももは勝手に上がっていて、自分で上げようとするとはブレーキになってしまう。つまり、見た目から真似すると速く走れません。アスリートも、どうやって身体を動かせばいいのか分から

ないという悩みをよく抱えています。ですが、自分自身の身体が思うように動かない、イメージしたフォームにならないということ、頭の片隅で意識できていれば、それを前提として動きを学べるはず

です。人間は賢いからいずれ体得するかもしれないけれど、原理が分かっているならば、習得も早くなると、私は考えます。身体が思うように動かないという悩みは、物理法則の奥深いところに関わっています。あなたの経験が浅いからできないのではなく、できないことにはそれなりの理由がある。うまくいかないのは必然なんです。

●SFCでの学び
研究とスポーツの関わりという面から見て、SFCの環境はどのようなものでしょうか。

豊田 勉強を積み重ねながら進路を変えていける環境は、SFCならではの環境です。入学当初は、今取り組んでいるバイオメカニクスや人間工学などは興味範囲ではなく、関連する授業も履修していませんでした。

また、例えばスポーツ科学専門の学部だったら、周りには、スポーツに関係のある人しかいないわけですよね。けれどもSFCなら、スポーツに関係ない人たちにもたくさん出会えます。その人たちと話していて面白いアイデアが生まれたり、スポーツとは関係ない話題で盛り上がったりする機会がたくさんあるキャンパスだなと感じます。

仰木 そうだね。私も、学生がスポーツを頑張りつつ、アスリートではない学生たちとも一緒に学べるのは良いところだと感じています。教員にも違う立場やコミュ

ニティの人がいて、いろいろな切り口から物事を見えています。SFCにしていると、自分の研究やスポーツ科学がどう見られているかが分かりますね。

豊田さんにとってスポーツとは何ですか。

豊田 アスリートの私にとって、スポーツとは「極めるもの」です。しかし、スポーツには、自分で見る、支えるといった、いろいろな関わり方があります。スポーツを通じて幸せだと思えるなら、どんな形でも正解だと思います。

——今後の抱負や読者へのメッセージをお願いします。
仰木 SFCは自由で、メニューが多いレストランのようなものです。選択肢が多いということは、難しい面もありますが、悪いことではありません。私は、とても良い環境だと思います。

豊田 私は卒業後も競技を続けていきます。活躍を応援していただけると幸いです。
(構成・井庭晴香)

仰木 裕嗣 (おおぎ・ゆうじ)

政策・メディア研究科教授。
専門は、スポーツ工学、スポーツバイオメカニクス、生体計測、無線計測。

豊田 兼 (とよだ・けん)

環境情報学部 4年

データ収集のための機材

仰木研の学生たち



フェンサー in SFC

桑原 武夫
飯村 一輝
千田 健太

●研究者の一面を持つフェンサーたち

SFCではどのような研究をしていますか。

千田健太先生
(以下、千田)

私が専門的に研究しているのは、スポーツのバイオメカニクスです。研究会では、

広い意味での

飯村一輝さん(以下、飯村)僕は現在、千田先生と水鳥寿思先生(総合政策学部准教授)の合同研究会に所属しています。研究会では、子どもたちにスポーツに触れるきっかけを提供することが、成人期にどのような影響を及ぼすのかというテーマで研究をしています。

スポーツ科学を学生と一緒に研究しています。SFCに着任して間もないですが、これから学生と共に私も多くのことを学んでいきたいと思っています。

テーマは、マーケティングや消費者研究です。

皆さんがフェンシングを始めたいきっかけを教えてください。

パリ 2024 オリンピック男子フルール団体で金メダルを獲得し、フルール個人では4位に入賞した、SFC在学中の飯村一輝さん。ロンドン2012オリンピック男子フルール団体で銀メダルを獲得し、パリ2024パラリンピックでは車椅子フェンシングの監督を務めた千田健太先生。慶應義塾体育会フェンシング部の現部長の桑原武夫先生。SFCとフェンシングに馴染みのある三人にお話を伺った。

桑原武夫先生
(以下、桑原)

私はSFCが開設された一九九〇年から総合政策学部で教員をしています。私の研究会の

桑原 飯村さんのお父様はただのフェンシング経験者ではなく、有名なフェンシング指導者なんです。

千田 私は、テレビで放映されることの多い競技に憧れて、小学

生の時はサッカーや野球をやっていました。しかし、団体競技ではなかなか結果が出ず、難しさを感じていました。中学校に入って、新しいスポーツを始めようと思ったときに、地元有名なフェンシングクラブがあったので、フェンシングに挑戦しました。やればやるだけ成果が出るのが楽しく、個人競技ならではの面白さを新鮮に感じました。

フェンシングを始めるきっかけになったのはご家族ですが、このようなケースは少し特殊かもしれませんね。

私がフェンシングを始めたいきっかけは、ひょんなことから十一年前に体育会フェンシング部の部長に就任したことです。当時、部の監督を務めていたのは、SFCで

フェンシングの授業を担当していた田中由美子さんです。田中さんに挨拶をするために、フェンシングの授業に顔を出したところ、

「フェンシングは面白いですよ。騙されたと思ってこの授業に参加してみませんか」と声を掛けられ、

言われるがままに普段着で挑戦しました。その一回でフェンシングの魅力

飯村 僕の友達もこの間、フェンシングの授業で桑原先生にお会いしたと言っていました。

●競技者が感じる面白さ
——フェンシングの魅力はどこにあると思いますか。

飯村 フェンシングは一瞬のスポーツです。じゃんけんのように一瞬で勝負が決まる。その一方

で、じゃんけんよりも複雑な要因が絡まっています。例えば、距離やスピード、慎重さ、リーチ(身長)などです。複雑な状況の中で、相手が行いたいことを読むという駆け引きが行われる。これがフェンシングの一番の魅力だと思います。

千田 フェンシングにはその人独自のスタイルを作り上げていく面白さもありますね。私が外国の選手と戦うようになった時に、対戦相手の身長の高さを考慮できずに開始五秒で負けてしまいました。このことは今でもよく覚えています。その後、私の長所と短所を整理して、自分なりのスタイルを作り上げていきました。

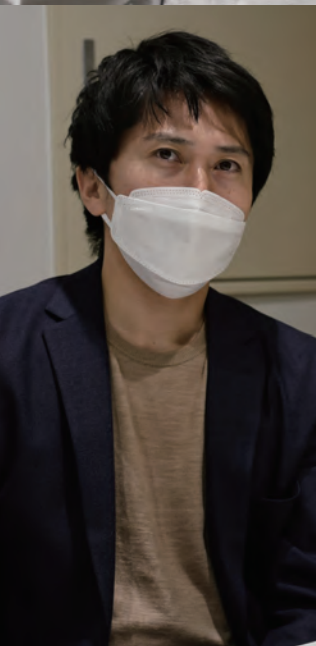
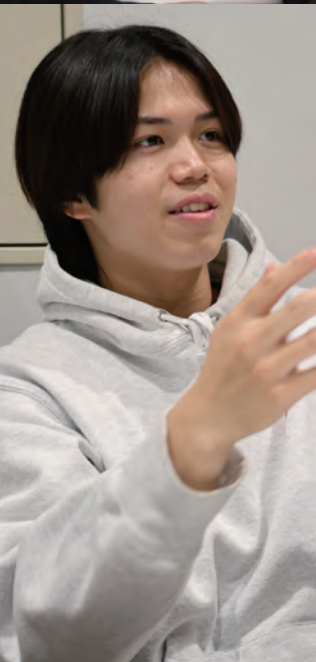
桑原 今のお話だと、フェンシングの町道場に行っていましたというように聞こえるけれども、千田先生のお父様もまた一流のフェンサーで、現在は日本フェンシング協会会長を務めている方(千田健一さん)です。お二方がフェン



日本フェンシング協会 / Augusto Bizzi_FIE



パラリンピックで指導中の千田先生



桑原 フェンシングの魅力は感覚的に楽しいところですね。初めて剣を持って、電気に繋いでやってみると分かるんです。相手を突いてランブが点いた時の感覚、突かれて悔しかった時の感覚。剣を払おうとしてもなかなか払えない腕の感覚もあれば、距離を測るために脚の感覚を頼りにすることも。少しずつ考え方が分かってきて、できることが増えていくのを実感できます。

桑原 武夫
(くわはら・たけお)

総合政策学部教授。
専門は、マーケティング、消費者研究。

飯村 一輝
(いいむら・かずき)

総合政策学部3年

千田 健太
(ちだ・けんた)

総合政策学部専任講師。
専門は、フェンシング、スポーツ運動学、スポーツバイオメカニクス。

飯村 生で試合を見たときの衝撃はすごいですよ。それは僕たちが保証します。

飯村 僕は中学生の頃から、フェンシングと勉強に自主的に取り組むというのを大切にしてきました。中高のフェンシング部の顧問の先生はフェンシングの経験がなかったので、僕は自分でメニューやスケジュールを全部組み立てていたんです。高校生になると、移動時間や遠征先での隙間時間を有効活用して、フェンシングと勉強を両立させていました。こうした経験から、自分なりに練習や勉強のスケジュールを組みたいと思うようになり、進学先の大学を選ぶときも、自主性を重んじるSFCが最適の環境だと考えました。

飯村 今回のパリ2024オリンピック・パラリンピックがきっかけで、フェンシングが取り上げられることが増えました。でも、それは一過性の人気に過ぎないとも思っています。また、実際に始めたくても敷居が高いと感じる人も多いようです。

千田 世界的に見てもフェンシングの研究はそれほど進んでいません。これからさらに競技のパフォーマンスのメカニズムを明らかにして、フェンシングの発展に寄与していきたいです。

(構成・藤田叶子)

飯村 さんがSFCへの入学を決めた理由や、競技と学業を両立させる秘訣を教えてください。

飯村 今後のパリ2024オリンピック・パラリンピックがきっかけで、フェンシングのこれから今後フェンシングを一層普及させていくために必要なことは何でしょうか。

飯村 先生はマーケティングをご専門にされていますが、その観点から、フェンシングの競技人口を増やすことについて、どのようにお考えですか。

千田 世界的に見てもフェンシングの研究はそれほど進んでいません。これからさらに競技のパフォーマンスのメカニズムを明らかにして、フェンシングの発展に寄与していきたいです。

桑原 フェンシングの魅力は感覚的に楽しいところですね。初めて剣を持って、電気に繋いでやってみると分かるんです。相手を突いてランブが点いた時の感覚、突かれて悔しかった時の感覚。剣を払おうとしてもなかなか払えない腕の感覚もあれば、距離を測るために脚の感覚を頼りにすることも。少しずつ考え方が分かってきて、できることが増えていくのを実感できます。

飯村 僕は中学生の頃から、フェンシングと勉強に自主的に取り組むというのを大切にしてきました。中高のフェンシング部の顧問の先生はフェンシングの経験がなかったので、僕は自分でメニューやスケジュールを全部組み立てていたんです。高校生になると、移動時間や遠征先での隙間時間を有効活用して、フェンシングと勉強を両立させていました。こうした経験から、自分なりに練習や勉強のスケジュールを組みたいと思うようになり、進学先の大学を選ぶときも、自主性を重んじるSFCが最適の環境だと考えました。

飯村 今回のパリ2024オリンピック・パラリンピックがきっかけで、フェンシングが取り上げられることが増えました。でも、それは一過性の人気に過ぎないとも思っています。また、実際に始めたくても敷居が高いと感じる人も多いようです。

千田 世界的に見てもフェンシングの研究はそれほど進んでいません。これからさらに競技のパフォーマンスのメカニズムを明らかにして、フェンシングの発展に寄与していきたいです。

桑原 フェンシングの魅力は感覚的に楽しいところですね。初めて剣を持って、電気に繋いでやってみると分かるんです。相手を突いてランブが点いた時の感覚、突かれて悔しかった時の感覚。剣を払おうとしてもなかなか払えない腕の感覚もあれば、距離を測るために脚の感覚を頼りにすることも。少しずつ考え方が分かってきて、できることが増えていくのを実感できます。

飯村 僕は中学生の頃から、フェンシングと勉強に自主的に取り組むというのを大切にしてきました。中高のフェンシング部の顧問の先生はフェンシングの経験がなかったので、僕は自分でメニューやスケジュールを全部組み立てていたんです。高校生になると、移動時間や遠征先での隙間時間を有効活用して、フェンシングと勉強を両立させていました。こうした経験から、自分なりに練習や勉強のスケジュールを組みたいと思うようになり、進学先の大学を選ぶときも、自主性を重んじるSFCが最適の環境だと考えました。

飯村 今回のパリ2024オリンピック・パラリンピックがきっかけで、フェンシングが取り上げられることが増えました。でも、それは一過性の人気に過ぎないとも思っています。また、実際に始めたくても敷居が高いと感じる人も多いようです。

千田 世界的に見てもフェンシングの研究はそれほど進んでいません。これからさらに競技のパフォーマンスのメカニズムを明らかにして、フェンシングの発展に寄与していきたいです。

水鳥 寿思 東海林 祐子



スポーツコーチングは、トップ選手の活躍を支えるのみならず、人々がスポーツに親しむ上でも重要な手法である。その知識は、研究と実践の現場でどのように生み出されているのだろうか。パリ2024オリンピックで体操男子日本代表の監督を務め、団体を金メダル獲得に導いた水鳥寿思先生と、部活動での指導者経験を経て、長年コーチングを専門に研究されている東海林祐子先生にお話を伺った。

●実践から研究への足跡
現在に至るまでのお二人の来歴を教えてください。

東海林祐子先生（以下、東海林）

研究者になる前は、十一年間高校教員として男子ハンドボール部の指導をし、全国優勝を達成しました。引退後に振り返ると、チームがうまくいかなかった時は、指導者である自分が心理的葛藤を抱えていて、私とその葛藤から解放された時に初めて、ようやくチームが強く

なっ
たという実感
があったんで
す。指導者側
の葛藤を明ら
かにすることで、選手にとっても
苦しい時間を短縮できるのではな
いかと考え、研究者になりました。

現在は二つの研究会を開講しています。一つは、指導者や選手同士のコミュニケーションを通じたスポーツパフォーマンスの達成、もう一つは、社会やコミュニティ

で活動しています。

水鳥寿思先生（以下、水鳥）

僕は選手として体操競技に取り組んできて、二〇〇四年にアテネオリンピックに出場し、男子団体総合で金メダルを獲得しました。引退してからは体操男子日本代表の監

の構成員に良い影響を与えるためのコーチングの教材開発を目指し
督を三大会務め、現在は日本オリ
ンピック委員会や日本体操協会で
アスリートの実践的なサポートを
行うなど、トップスポーツを中心
に関わっています。研究会では、
技術面に限定せず、心理面などの
様々な観点から、競技力の向上に
ついて考えています。また、男子
プロバスケットチーム「湘南ユナイ
テッドBC」とコラボして大会
をコーディネートしながら、ス
ポーツそのものの価値を考える機
会を作っています。

●コーチングの現場で求められていること

お二人が実際に指導者として感じてきた難しい点や、心掛けている点がありますか。

水鳥

一般に、以前は指導者の与える指示に選手が一方的に従っていました。現在は対話を通じて選手が納得することが大切にされています。指導者が、指導を裏付ける理論を理解した上で提案ができるかどうかが重要になってきています。技術もどんどん進化しますから、自分が経験したことのない技を指導することもありません。選手から信頼してもらいたくても、情報収集は欠かせません。また、ある動作ができないことに對して、なぜできないのかという背景を分析してコーチングすることも大切です。結局は人と人の関わりですから、指導される時の選手の心理的状况を考えたり、抱えている事情を理解したりすること

が適切なコーチングに繋がるのだ
と思います。

東海林

いかにして心の声を聞いていくかというところですね。対話することはとても大切で、私は指導者だった時に、強制的なコーチングをしてしまい、選手が全く心を開いてくれなかった経験があります。さらには選手が自分たちで考えることをしなくなり、指示を待つようになってしまったのです。これではまずいと思い、選手への関わり方を模索していきました。それから少しずつ強くなっていったのですが、選手たちは、自分たちで遊びの要素を取り入れ、どんどん戦術を編み出し、ハンドボールを楽しんでいました。球技は騙し合いなんですよね。スポーツの本質としての「遊び」を私自身が忘れていたのだと思います。

共通しているのは、皆なかなか本音を言わないということです。本当は自分たちの意見や考えがあるけれど、それを隠して、衝突を避け、ただ、なんとなくチームに所属している。皆本当は、心から湧き上がってくる素晴らしい感情があるんです。それを日頃の練習で表現できるように指導者自身も「楽しい」「寂しい」「悔しい」「嬉しい」などの感情を表現して、共有してほしいですね。日本において特にスポーツでは、感情というところがタイプなイメージがあります。しかし、心から湧き上がってくる自分の心の声、仲間の心の声を大事にしてコミュニケーションを取ってほしいと思います。

選手もあまりトップダウンを好みません。指導者による指示よりも、選手同士での話し合いの方が受け入れられやすい場面もあります。そういう時には、指導者がキャプテンを通じてアドバイスをします。何がベストかを考えることがポイントです。

東海林

部活動や体育では目的もモチベーションも様々です。でも、どんな生徒でも必ず夢中になる瞬間がある。何に夢中になるのかを知るために、現場ではたくさんコミュニケーションを重ねています。打ち解けるのにやはり時間はかかりますから、継続的にアプローチしていくことが大切です。

●研究と実践の間で

——コーチングの研究と実際に競技が行われる現場に共通点やギャップはありますか。

水鳥 体操競技は個人種目で、自分の感覚が大事な競技なので、

——トップスポーツでもアマチュアのスポーツチームでも、コミュニケーションは大切なんですね。



東海林研究会の様子

水鳥 ギャップについて言え

ば、研究成果を現場のコーチングに活かすことは簡単ではありません。動作のメカニズムを分析する

実証的なスポーツ研究はあります。しかし、優秀な選手に共通する無意識的な動作などを明らかにすることは難しく、あまり研究されていません。それに、無意識的な動作を明らかにしたとしても、その成果をコーチングに活用することもまた、容易ではありません。

東海林 そもそも、コーチング

に関する研究の多くは、方法論としての個別の技術・戦術の研究と、社会学や心理学などに基づいた一般的なコーチングに関する研究とに分かれていて、通底する理論が確立されていません。けれども、選手のパフォーマンスは技術のみならず、心や体力などが合わさって高まっていきます。この点を踏まえた包括的な研究がなされていないんです。ただ、ここ四、五年

水鳥 僕の研究会には、ダンス

競技においてコスチュームや合いの手がジャッジに与える印象をテーマに研究している学生がいま

す。いわゆる技術分析だけでなく、いろいろな文脈でスポーツを捉えている学生が集まることで、研究の面白さが広がっています。

水鳥 僕はパリオリンピックを

最後に、体操男子日本代表の監督を退任しました。これからの目標は、自分が体操競技やトップアスリートという枠の中で培ったもの

最後に、今後の抱負や読者へのメッセージをお願いします。

で異なる分野との融合を目指す動きはありますね。学会でも、いろいろな学問分野の先生に頻繁に来て

いただいたいています。

水鳥 スポーツの世界では、単

に練習するだけでは勝てないと言われるようになりました。現在トップスポーツでは、効率的に練習する方法や、練習以外での選手のサポートについても模索されています。技術指導だけではなく、情報科学や医学などの様々な分野でチームを編成し、ハイパフォーマンス・サポート(注)を行うことが必須になってきています。

東海林 私はSFCで、様々な

視点を増やす、視野を広げる

— 体育大学や体育学科もある中で、SFCでスポーツに関する研究を行う意義はどこにあると思われ

れますか。

を社会に還元することです。実際に教材開発の研究などにも取り組んでいます。研究会でも、自身の経験や関心をいかに社会にアウト

プットするかという視点を持って、活動を行っていききたいです。

東海林 私の研究会には、学部

時代は競技に一生懸命取り組んで、その後、修士課程や博士課程に進学してくれる学生さんが多く

います。こうした人たちと一緒に学べることはとても幸せなことです

ね。政策・メディア研究科も含め、SFCで学ぶことで、日本の

スポーツや体育を引っ張っていきける人材になると自信を持って言えます。様々な分野の教員とスポーツの新しい価値を発見できる環境

視点からスポーツやコーチングを

考えることの重要性を学びました。博士論文のテーマである「コーチングのジレンマ」は、当時大学院にいらっしやった金子郁容先生(元政策・メディア研究科教授)の研究会で知った「囚人のジレンマ」が大きなヒントになっていま

す。他の分野の先生方のスポーツに対する考え方も衝撃的で、スポーツは人間を育てる・社会を作る手段の一つだと考えるようになりました。

水鳥 体育大学などでは、専門

分野や競技で完全に縦割りになっていることが多いのに対して、SFCでは、分野横断的な研究が多くなされており、視野を広く持つことができます。SFCに着任した最初の年に加藤貴昭先生(環境情報学部教授)と合同研究会を開いていましたが、そこではスポーツではない分野の研究をしている学生もいました。ある学生は、人

間の行動心理の視点から視線移動

の研究をしていました。それをスポーツと繋げて考えた時に、僕は体操でもこういう視線の動きをしているかもしれないと、ヒントを得る部分があったんです。スポーツと違う文脈で行われている研究であっても、活かせる場所があります。また、自分の専門競技以外のスポーツに関する見解や研究結果に触れられるのも良いところ

です。

東海林 私は数年前から、二コマ

連続の研究会Aではなく二コマの研究会B二つを開講するようになりました。すると、スポーツとは直接関連のない研究会に所属している学生たちが一コマだけ履修したり、聴講をしたりするようになったんです。違う知見を持った人たちが、競技に一生懸命取り組んでいる人たちという議論を交わしています。学生にとってすごく良い化学反応が起こっています。

水鳥 寿思 (みづとり・ひさし)

総合政策学部准教授。
専門は、スポーツ指導法。

東海林 祐子 (とうかいりん・ゆうこ)

政策・メディア研究科准教授。
専門は、スポーツ心理学、コーチング。

スペシャリストとしてSFCで教壇に立つ先生方。普段は見えない日常のルーティンやこだわりをのぞき見たい。記念すべき第一回は、牛山潤一先生が腕時計への思いを語る。

引き立て役の白と黒

服や装飾品は自分の本質を際立たせるためのもので、あくまで主役は僕自身だと思っているんです。だから、なるべくシンプルに、だけど身に着けている自分自身だけは気分が高揚したりうっとりしたりする、そんなものがない。特にここ数年は洋服や靴、リュックは黒と白ばかりですね。これってよくよく考えると、講義スライドの作り方にも似ている気がします。僕の講義スライドは、基本的には白をバックに黒字で書いていて、超シンプルです。カラフルなスライドだと重要なポイントが絞りにくいし、学生がスライドにばかり気を取られて、肝心の自身が伝わらない気がして嫌なんです。もちろんスライドも講義に必要なだ

けれど、それはあくまでも僕のトークをサポートするものです。そういう意味では、服や装飾品についても一緒に、そのものが目立つのではなくて、そっと僕を引き立ててくれ、と思っています(笑)。

両親からもらった時計

時計もオールブラックです。右腕に着けている時計は明確に僕の装飾品の中心にあります。この時計を着け始めてから、極端に服装もモノトーンになったかもしれません。

この時計は、三年前、教授に昇任したお祝いに、両親からプレゼントされたものです。僕にとって、十年前にSFCに准教授として着任した時が最高の瞬間でした。それまでも、そしてこれか



らも、母校でもあるSFCが教員として僕を受け入れてくれたという出来事を超える感動はないと思います。けれど、教授に昇任した時の両親の喜びようは想像以上でした。両親が喜ぶ姿を見て「きつと自分は大きな親孝行をできたんだ」と実感しました。本当のことを言うと、「昇任した暁には、いい時計を買ってやる！」と思っ

いたのですが、両親からのお祝いの提案もあったので、それに甘えさせてもらうことになりました。毎日、玄関先でこの時計をカチツと着けた後に靴を履いて出勤します。この一連の所作がいわゆる僕のルーティンで、これによって一気に戦闘モードに入ります。前日にシヨックを受けたことがあっても、すごく楽しかったことがあっても、朝、儀式的にそうやって日常に入ります。ルーティンであると同時に、親孝行の証を背負うことでもあるので、気合いが入りますね。逆に、帰宅した時に最初にすることは時計を外すこと。時計を外すと肩の力が一気に抜けて、リラックスモードになれます。

思い返せば、僕は大学院生の時から、なけなしのお金で、身の丈に合わない服や装飾品を買っていました。その頃って、当然、お金はあまり稼げないし、社会に出て先に働いている仲間たちからは「学生さん」と半分バカにされているような感覚を持っていまし



自分だけの思いの形

時計が自分にとって大切なものになってから、時計への興味・関心がどんどん増してきました。他の人の時計をじっくり見てしまうこともあります。僕らの世代では、テレビに出る芸能人やプロ野球選手が着けている時計は、いわば「成功者の象徴」というイメージでした。それから、子どもの時に夢中になっていたドラマ『あぶない刑事』で、主人公のタカが銃をバッグと出した時に右腕にチラッと時計が見えるシーンがものすごく印象に残っています。その影響で、僕は中学時代から(右利きなのに)ずっと時計は右腕に着けています。操作するのは、銃ではなくてレーザーポインタですけど(笑)。

その一方で、スマホやスマート

ウォッチが出てきた今の時代、腕時計はほぼ「必要ない」ものになりつつありますよね。他人の腕時計なんて、ほとんどの人は気にしないと思います。けれど、僕はそれで良いと思うし、だからこそ

面白い、究極の自己満足だと思うんです。僕の時計は、光の当たり方で黒の見え方が変わってすごく綺麗で、見ているだけでうっとりします。そして、一般的な時計に塗ってあるような蓄光塗料がこの時計には付いていないから、暗いところではまったく針なんて見えません。単に購入前の確認が足りなかつただけですが、格好いいのに不器用さのあるところが、なんだかかわいらしいと感じます。その時計の魅力は僕にしか分からないと思うことに楽しみを見出しています。スポーツや芸術と同じで、嗜好品は「必要ない」からこそ魅力がある。自分にとって大事ならそれで良いと思います。

二つの腕時計

実は、左腕にも腕時計を着けています。左腕に着けているのはいわゆるスマートウォッチで「交通系ICとして便利」くらいの理由で使っています。一学期に一回くらい、授業の終わりに「なんで

両腕に時計を着けているんですか？」と学生に聞かれることがあります。答えることはしませんが、謎のある人の方が魅力的だと思いませんか？(笑)

(構成：吉松野乃子)



牛山 潤一

(うしやま・じゅんいち)

環境情報学部教授。

専門は、運動生理学、神経科学。

When I was young

学生にとって、教員はどこか遠い存在である。

しかし、そんな教員にも学生だった時代がある。一体どのような学生生活を送り、それは、その後の人生にどのような影響を与えたのだろうか。

今回は、シリア出身で修士・博士課程を日本で過ごされたアルマンスール・アフマド先生にお話を伺った。



来日してすぐ、日本の文化を体験するマンスール先生

أحمد المنصور

●宗教の多様性に触れた幼少期

——どのような幼少期を過ごしましたか。

私はシリア出身で、幼稚園、小学校、中学校はアレppo（シリア北部の都市）の私立の学校に通っていま



右からマンスール先生、弟、姉

した。小学校は、教会の付属のキリスト教系の学校でした。けれど、私を含め、生徒の半分はムスリム（イスラーム教徒）です。宗教の授業では、キリスト教のクラスとイスラーム教のクラスに分かれて勉強していました。

シリアにはキリスト教徒がいるけれど、私の家族や親戚はみんなムスリムで、周りに住んでいる人たちもムスリムばかりでした。暮らしやすいのために、モスクの周りにはイスラーム教徒、教会の周りにはキリスト教徒が集まって生活しています。そのような環境で、小さい頃からキリスト教徒の友達がいたことは、自分の考え方を柔軟にしてくれたと思います。

一方で、私立の学校は規則が多く窮屈でしたから、高校は公立の学校に進学しました。

——高校生までは何に興味がありましたか。

一番興味があったのはスポーツです。父に勧められたのがきっかけで、小学校六年生の時にバスケットボールを始め、大学三年生まで続けていました。

また、高校のアラビア語の先生の後押しもあり、アラビア語を大切にするようにになりました。高校のアラビア語の先生は、有名な詩人としても知られる学者でした。入学したばかりの時に、なぜか彼にアラビア語の古典をプレゼントされたことがありました。文学部アラビア文学科の大学生でも読むのが難しい本でしたが、私は高校一年生の時に少しずつ読もうとしました。なぜ先生が私を選んで本を渡したのかは分かりませんが、その時から将来アラビア語に関わるという予感がしていました。

●やっていることを好きになる

——大学に進学して機械工学を学ぶうと思ったきっかけは何ですか。

もともと、歯学部に進学した近所のお兄さんの影響で歯学部に入りたいと思っていました。しかし、シリアでは数年間にわたる混乱の時期があり、その終わりには故郷のハマー（シリア西部の都市）で「ハマー虐殺」と呼ばれる事件が起きました。多くの親戚が事件に巻き込まれる中で、共通試験の受験がうまくいかずに、歯学部の一つ下のランクの工学部に進学することになりました。そもそも、私の時代には私立の大学はなく、国立の大学も全国に三つしかなかったため、大学進学は狭き門でした。

機械工学を選んだのは、高校の夏休みに建設会社でアルバイトとして働き、アレppo大学の学生寮の建設に携わったのがきっかけです。上司の方々は機械を専門とするエンジニアで、彼らの姿をとっても魅力的に感じました。



東北大学の日本語研修コースの様子

——アレップポ大学ではどのような学生生活を過ごしていましたか。

入学してからは、数学、物理学、化学などを幅広く勉強しました。最初の二年は数学の科目が多く、難しかったです。機械の設計に必要な熱力学や流体力学などに数学を使うため、しっかりと学ぶ必要がありました。

勉強で忙しかったのですが、スポーツは続けていて、大学のバスケットボール部と陸上部に入っていました。もともとは歯学部に進学したかったけれど、工学部に進学してからは機械工学の勉強に励みました。私は、「好きなことをやる」か「やっつけることを好きになる」かのどちらかだと思っています。ずっと嫌々やっていたのは、人生は進みません。だから、状況がどうなろうと感謝します。アルハムドリッラー(الله أكبر)。これはアラビア語の慣用表現で、直訳すると「アッラーに称賛あれ」という意味です。日本語で「おかげさまで」というように、アラブの人々は日常的に口にします。

まず驚いたことは、英語を話す人が少ないことでした。来日する前は、日本では英語が通じると思っていました。当時、英語が通じないことがショックで帰国する外国人もいたんですよ。しかし、私は覚悟を決め、できるだけ早く日本語を覚えるようになりたいと考えるようになりました。

——修士課程や博士課程の時期はどのように過ごしていましたか。

来日してから半年間は、東北大学で日本語研修コースを受けていました。修士課程が始まる直前に結婚し、その後は家族と一緒に暮らしていました。

日本では、金属材料の材質制御について研究していました。博士号を

取得させていました。シリア国内では、専攻によっては博士課程が設置されていないこともあるからです。私は、茨城大学で修士号を取得し、博士課程は広島大学に進学しました。

しかし、日本に留学するまでには紆余曲折がありました。最初は東ドイツへ推薦されました。三ヶ月間ダマスカスでドイツ語の集中講義を受け、ドイツ語で会話できるほどにもなりましたが、その後、東ドイツへの派遣の話はなくなってしまいました。

●何も情報がない中で、来日することになった経緯を教えてください。

トップの成績で学部を卒業して、助手として採用されました。アレップポ大学は、採用した卒業生を世界各地

取得すると、広島大学で一年間助手として働き、その後東京大学に移りました。その二年後にはシリアに帰国しましたが、日本との関係は続き、研究の他にも外務省(在シリア日本大使館とJICA)関係の仕事やアレップポ大学学術交流日本センターの責任者の仕事もしていました。そして、二〇〇九年に再び来日し、SFCで教えることになりました。

●今できることをすれば扉は開く。最後にSFCの学生へメッセージをお願いします。

人生について迷っている学生が多いです。将来のことを計画しても良いのですが、無用な心配をするのはやめた方が良いでしょう。今できることをしっかりしたら、おのずと扉は開きます。では、SFCにいる間に何ができるでしょうか。

まず、様々なスキルと柔軟性を持ってほしいです。特にコミュニ

国の大学に派遣し、修士号、博士号を取得させていました。シリア国内では、専攻によっては博士課程が設置されていないこともあるからです。私は、茨城大学で修士号を取得し、博士課程は広島大学に進学しました。

そして、次はソビエト連邦(ソ連)へ推薦されましたが、ソ連ではイスラームの礼拝や断食が禁じられていたため、もう少し自由なところに行きたいと思い、断ることにしました。辞退するのに苦労しましたが、ちょうど日本大使館から日本の文部科学省の奨学金の案内が来ていて、ソ連への派遣の代わりに日本行きが決ま

ケーションスキルですね。私は、在シリア日本大使館やJICAなどから仕事を頼まれてきました。それには様々な理由がありますが、一番の理由は私の日本語能力です。留学中は研究はもちろん、同僚と比べても日本語や日本文化の習得に特に力を入れていました。これも一つのスキルです。将来どのように役立つかわからなくても良いので、とにかくスキルを身に付けることが大切です。

視野を広げることも大切です。あらゆる専門分野が集まるSFCで、学際的な人間になってほしいです。一年生から複数の研究会に所属することができると環境や、たくさん言語を学ぶことができる環境も貴重です。この環境を利用しない手はないでしょう。

(構成: 藤田叶子)

りました。奨学金のための書類審査、筆記試験、面接を通過し、日本への派遣を紹介されてから一年後の一九八九年四月、二十五歳の時に来日しました。

——日本への推薦を受けるまでに、日本に関する知識はありましたか。

ほぼ何も知りませんでした。ただ、二つの矛盾するイメージがありました。一つは侍や格闘技、もう一つは車や電化製品のイメージです。映画の世界のように、日本人全員が空手や柔道をしているかと思っていました。けれど、日本人全員が侍や格闘家だったら、車や電化製品を作っているのは誰なのかも疑問に思っていました。

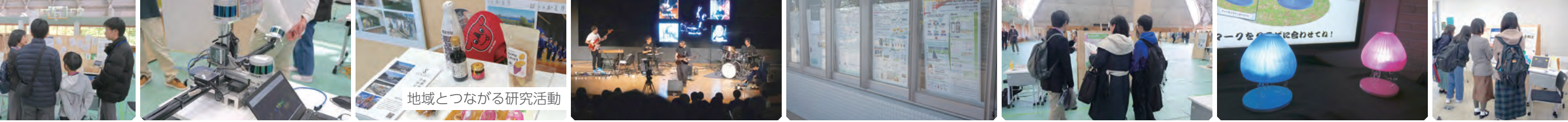
●日本で暮らす覚悟を決めた大学院生時代

——来日して印象的だったことはありますか。

アルマンスール・アフマド

総合政策学部訪問講師(招聘)。
専門は、人間工学、機械と材料工学、イスラーム学、アラビア語。

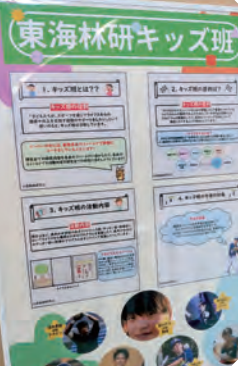




地域とつながる研究活動

S F C 万学博覧会取材記

2024年11月23日と24日の2日間にわたって開催された万学博覧会。ORF（オープンリサーチフォーラム）に学术交流大会、オープンキャンパス、よろこぶ大学図書館へ、藤沢市民講座……。今回も盛りだくさんの企画で盛況だった。SFCの学生以外にも老若男女様々な人が集い、嵐のように過ぎ去った2日間。いったいあの時、SFCで何が起こっていたのだろうか。



自動運転のシミュレーション



大きなアリーナが窮屈に感じられるほどたくさんの展示が



バンドの演奏がシータ館に響く



体組成計の結果からAIがSFCのサークルを紹介



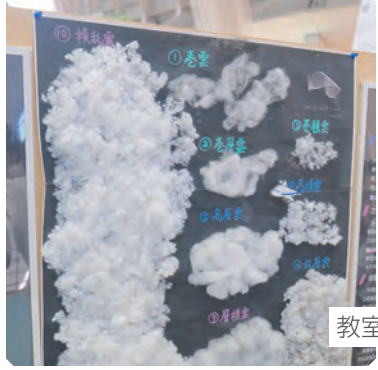
看護医療学部の展示も



今回のORFテーマは「The Landscape of SFC — Cultivate The Land —」。SFCの森に風景をつくるという意味を込めて



本誌p.4をチェック！



教室だけでなくハワイエも販った



災害復興支援の特別展示では、陸上自衛隊による足湯が大人気



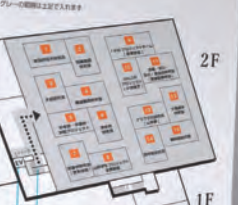
誰がモデルなのだろう？



動くプロジェクトを追いかけて遊ぶゲーム



加茂総合政策学部長による講演も





連載

贈る言葉

今年3月SFCをご退職される先生方に、これまで長く教鞭を執られてきた中で特に思い出に残っていることやお気に入りの場所、これからのSFCに期待することについて寄稿していただいた。多様な学問領域の中を常に第一線で活躍されてきた先生方の目には、どのようなSFCが映し出されているのだろうか。



キャンパスツアーには未来のSFC生がたくさん！

少し離れたSBCにも展示が。雰囲気が変化する

別日にも藤沢市民講座が開催された

特別企画の「まちづくりアイデアコンテスト2024」表彰式には藤沢市長の姿も

タウ館で開催された慶應SFC学会の学術交流大会では、多くの学会員が発表した



No.15

対話によって深まる学び

大堀 壽夫 (おおほり・としお)

経歴：2018年-2025年 環境情報学部 教授
学位：博士（言語学）
専門分野：言語学、特に意味論・機能的類型論（接続構造の類型と通時相）・談話分析



●**お気に入りの一枚**
SFCは私が学んだアメリカの大学（UC Berkeley）のキャンパスとちょっと似た感じがします。緑が多くアップダウンがあるところでしょうか。西脇順三郎氏の「旅人かへらず」の碑があるところから眺めた田園風景は好きなのですが、これは昨年も取り上げられていたので、さてどうしようかと思いい、一枚の写真を選びました。梅雨のさ中の短い晴れ間に撮った白露です。撮影したのは、COVID-19の拡大にもなつてオンライン授業へと全面移行した時期に、研究室から授業と論文のために必要な書籍を自宅に引き上げた日のことだったと記憶します。葉っぱの上の白露は陽の下ではあっという間に消えてしましますが、大気を循環して

また姿を現します。そこに「易」と「不易」をふと感じ、諧謔を覚えたものでした。SFCでは七年間があつたという間に過ぎました。研究、教育、そして各種委員会とさわめて密度の濃い時間でした。その中で、立ち止まってささやかな息抜きをする機会を与えてくれたキャンパスの景観に感謝を捧げます。

●**SFCの学生へメッセージ**
かつて谷川俊太郎氏がある所のインタビューの中で、「若者に伝えたいことは？」ときかれて、「伝えたいことはないです」と答えていました。不特定多数に抽象化したことを伝えても響かないものだから、私がSFCで授業や委員会を通じて接点を持った学生たちの顔や声を思い浮かべながら、ほどほどに具体的な言葉を考えてみました。

私が出会った限り、SFCの学生たちは、自立の度合いが高いように感じられます。授業や成績、あるいはSL委員会での対応においても、変に他責的な人はいませんでした。その一方で、特にコ

ナ禍を経たためか、人のつながりが少し弱くなっている、あるいは遠慮がちな点は気になります。本来、学びとは対話によって成り立つ部分が大いものです。たとえ授業と直接に関係がないことでも、疑問をぶつけてきたら応える用意を私たちスタッフはみな持っています。また、学生同士でも気軽に声をかけをして、SFCという貴重な時間・空間をより深く共有してほしいなと思います。「となりの誰か」を「誰か」以上の存在にするチャンスを広げていってください。会話はリニアな系でなく、展開が単純には予測できないものです（だから言語学は面白い）。予想外の話題やリアクションから研究のためのアイデアをもらったことは私も何度もあります。言いたいことが十分に伝わらなくても、手がかりを生み出すことには価値があります。言葉を交わすことは創造への第一歩。もちろん、何かを実現しようとするれば行動が不可欠なのは言うまでもありません。そこで私の知る、自立したSFCの学生たちに向けて言葉をかけるとすればこうなるでしょう——語れ、動け、そして語れ。



No.14

オンリーワンの達人

今井 むつみ (いまい・むつみ)

経歴：1993年-1996年 環境情報学部 助手
1997年-2000年 環境情報学部 専任講師
2000年-2006年 環境情報学部 助教授
2006年-2025年 環境情報学部 教授
学位：博士（心理学）
専門分野：認知科学（特に認知言語発達科学、言語心理学）



●**私の好きなSFCスポット**
キャンパスの自然が好きです。ふと窓をみると季節によって違う姿をした木が目に見え込んでくるし、キャンパス入り口から車で坂を上がるときに、サクラの花や紅葉が見渡せると、季節を感じます。特に好きなのは冬のカモ池。飛来した水鳥たちが岸に並んで、よちよち歩いたり首を埋めて眠っていたり。そんな光景が大好きで、時々双眼鏡をもって鳥たちに会いに行きました。

●**SFCの学生へメッセージ**
AIが社会を席巻しています。私たちは「善く生きる」ために、AIとどう向き合い、つきあっていくべきなのでしょう。認知科学からの答えは、自分の見つけた分野でオンリーワンの達人になることです。どの分野にも超一流

の達人が存在します。認知科学では、超一流の達人と、一般的な熟達者の行動や心の働きの違いについて研究がされてきました。普通の熟達者も、一流の達人と同様、仕事を早く、正確にそつなくこなすことができますが、両者を隔てるのは、独自の「味」（スタイル）を確立しているかどうかです。そして、独自の味は「規範からの逸脱」から生まれます。

AIは日々進化し、どんどん人間の知性に近づいています。しかし、AIは、その学習の仕組みの故に、大半の人の平均を出力します。質の良い学習材料を人間が選んで学習させれば、「熟達者の間の平均」の再現はできますが、「超一流の熟達者のパフォーマンスを再現することは原理上できないはず」です。超一流の熟達者は唯一無二の「味」や「くせ」をもって、平均から逸脱しているからで、超一流の熟達者を集積して平均を取っても唯一無二の達人を作ることはいかならないからです。

超一流の熟達者とはそれぞれの分野で一つの基準で全員を比較して一番の人、ということではありません。一流の達人たちは、それぞれ異なる軸で規範から逸脱します。それゆえに、その分野全体で多様な熟達者の集団が生まれ、協

同してプロジェクトを行う意味も生まれます。これはまさにSFCがこれまで掲げてきた学びのスタイルですね。みなさんは、それを誇りに思い、継承していかたい。オンリーワンの熟達者はどのように生まれるのでしょうか？人間の乳幼児は、大人の言語インプットを分析し、そこに潜む規則性や意味を自分で発見し、それを記憶し、小さな知識を創ります。その小さな知識を自在に組み合わせ、アブダクション推論という、答えが一つに定まらない推論によって拡張していきます。アブダクション推論には誤りがつきものです。しかし誤りを犯したら修正すればよいのです。失敗、修正も学びの過程で欠かせない一部です。



No.17

SFCの設計と実装の強み

中村 修

(なかむら・おさむ)

経歴：1993年-1996年 環境情報学部 助手
1997年-2000年 環境情報学部 講師
2000年-2006年 環境情報学部 助教授
2006年-2025年 環境情報学部 教授

学位：博士(工学)

専門分野：インターネット、システムソフトウェア、オペレーティングシステム

●SFCの学生へメッセージ
慶應の理工学研究科に在学中、慶應義塾大学の新学部計画がスタートしました。これがSFCとの出会いです。僕の指導教授であった齋藤信男教授(第二代、環境情報学部長)は計画立案のメンバーでしたので、当時学生であった僕は、学生目線で愚痴を含めた意見を言わせてもらいました。その中のいくつかの意見がSFCとして実装されました。研究会への早期参加や移動の自由。助手の有期雇用制度などがそれにあたります。東大からSFCに転任した時、三年間の有期助手として着任しました。ある日、授業の準備をしていたのですが、「あれもう三年過ぎたのでは?」とふと思ひ、事務の窓口を確認に行くと、事務の方も「あつ、もう首になってますね!?」気がつきませんでした!と明るく返答されました(笑)。自分で提案したシステムに見事にやられてたって感じですよね!

慶應義塾大学の中で特にSFCでの学びを選んだ皆様ですから、すでにご承知と思いますが、SFCでの学びを再確認してもらえれば、より良い学生時代を過ごせると思います、僕の理解しているSFC



No.16

異端な開拓者であり続ける

國領 二郎

(こくりょう・じろう)

経歴：2003年-2006年 環境情報学部 教授
2006年-2025年 総合政策学部 教授

学位：博士(経営学)

専門分野：経営情報システム



●SFCお気に入りのスポット
中高と△(デルタ館)の間にキャンパス外に出られる小径が二つあって、中高に近い方を行くと、キャンパスを出たすぐの右手に浅間神社があるのをご存じだろうか? 学部長をやっていた頃、あまりにいろいろな問題が起こるので最後は神頼みの心境になってよくお参りした。元日には地域の方々への挨拶をする会があって、まずは神様にお参りしてから向かった。なにせ私は学部長になったら東日

●未来のSFCへ
SFC創設二十周年の時に『異端の系譜―慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス』(中西茂、中公新書ラクレ、二〇一〇)という本を書いて下さった方がいて、ちょっとした異端論争になった。私は「異端



No.19

若々しくチャレンジを

増井 俊之

(ますい・としゆき)

経歴：2009年-2025年 環境情報学部 教授
学位：博士（工学）
専門分野：ユーザインターフェース、
ユビキタスコンピューティング



●SFCのお気に入りスポットー
SFCの周辺の景色

藤沢は郊外のベッドタウンと思われ、SFCの周辺には風光明媚なところや公園もたくさんあります。SFC内に景色の良いところはたくさんありますが、湘南の海岸や、北部の丘から見える富士山や丹沢の景色もとても良いですし、こういう環境で大学時代を過ごせたのは幸運だったのではないのでしょうか。

私は、キャンパスのすぐ南を流れる「小出川」から見える富士山が好きです。小出川ではアジサイやヒガンバナも綺麗に植えられており、勉強の合間のリフレッシュにもっとおすすめすれば良かったかもしれません。

●SFCの学生へメッセージ

歳をとると、自分の昔の仕事や振り返ったり同窓会をやったりすることが増えるのですが、以下のようなことを感じます。

(一)若いときの趣味や友達
学生時代に好きだったことや頑張ったことはその後一生長続きするものです。私の場合、中学／高校の頃は電子工作やプログラミングのようなパズル的なものが好きでしたが、定年を迎えた今でもそれらの趣味は変わっていませんし、研究や開発でその方面の知見が役に立ったことが何度もあります。中学生だった一九七二年ごろ、私はセンサやトランジスタを使っているいろいろな工作をしていましたが、二〇二五年現在もセンサやトランジスタを研究開発に使っています。一九七六年ごろにはマイクロプロセッサが登場したので、プログラミングというものに興味を持ちましたが、二〇二五年現在もプログラミングを楽しんでいます。若いときに何かに夢中になったものは、将来きっと役に立ちますし、趣味としても長年楽しむことができるでしょう。

学生時代の友達は利害関係が少

ないですし緊密にやりとりしないため、関係が長続きすることが多いようです。職場の同僚などの場合、利害関係があるから親密な友人を作ることは難しいようです。SFCのような環境は、面白い人や優秀な人が集まっているわけですから、そういう人脈を将来も大事にすると良いと思います。

(二)新しいものへの挑戦
若い頃に得意だったことや頑張ったことがその後大事だと言いましたが、これまで縁が無かった分野のことにチャレンジすることはもちろん良いことですし、近年はそれがやりやすくなってきていると言えるでしょう。好きだったことでも時代遅れになることはありますし、新しい面白いことにチャレンジするのは良いことです。SFCでは「問題発見と問題解決」について考えることを学んだはずですが、様々なトピックについて将来もこういったことについて考え続けることが重要だと思います。

自分の好きなことを仕事にしている人は歳をとっても若々しく見えます。妥協せず、楽しい人生を追求してください。



No.18

壁と共に去りぬ

長谷部 葉子

(はせべ・ようこ)

経歴：2004年-2007年 環境情報学部 訪問講師（招聘）
2007年-2025年 環境情報学部 准教授
学位：修士（政策・メディア）
専門分野：英語教材、教授法、遠隔教育、カリキュラムデザイン、
異言語・異文化間コミュニケーション

●SFCのお気に入りスポットー
ティンガティンガの物語でつづるSFCライフ

私のお気に入りスポットは、教員として二十二年間SFCで生きていく生命の源泉となった、個人研究室入206のティンガティンガで描かれた部屋全面の壁画である。二〇一一年三月十一日までは、整然とした、機能性と書物に溢れた研究室だった。しかし、3・11の大地震で入206の壁面が一部破損して、穴が空いた。震災が人の心に空けた穴、学生も教員も様々な影響を受け、言葉を、人生の色を失った。ちょうどそのタイミングで、アフリカンペイントアーティストのSHOGENさんに出会い、その生きる哲学・平和構築への想いに大きな共感が生まれた。3・11を乗り越え、未来を切り拓く、

ちように本格的に取り組みだしたアフリカ研究をSFCにしっかりと定着させるといふ覚悟と、二つの強い理由から、SHOGENさんは長谷部葉子研究会の役員として、最大の研究発表のカタチとして研究室に壁画をプレゼントしてくださいました。これだけの大規模なティンガティンガは前例がなく、個人研究室の壁というところで物議をかますことは覚悟の上で、人生最大の勇気を奮って実現してしまつた。3・11を経てSFCも様々な面で、復興し、希望を持って新たな一歩を踏み出すために、自分ができることはこれのみだった。壁画が完成すると、研究室にあった書棚を一扫し、思考と創造力、それぞれの哲学を深め、共有し、議論する場が誕生した。この場で過ごす人、個々にお気に入りの壁画の部分があり、そこを思考の中に切り取り、取り入れ、独自の再生を行う。そしてその活発な思考活動で、個々の精神がぼーんと開放され、アフリカの自然の大地のはるかかなたへ解き放たれる。自分自身、どれほどの部屋に瞬時を惜しんで、こもり、思考し、もがき、様々なプロジェクトの源

泉を生み出したことか。退官とともに、この壁画は、またもこの個人研究室の壁に塗り込められ、消滅する。「残したい！」と思つたが、人生のはかなさを知り、今あるものを最大限に生かして記憶に、脳裏に、感性に刻みこむことの大切さに気が付いた。終わるから、消えるから、また新たに予想しえなかつたことが生まれる。皆さんにこの場を残せないことは残念だが、一つの文化の軌跡として、KEIO SFC REVIEWの紙面に残せることは、何と幸せなことだろう。写真をのせるため、文章は削った、悔いはない。今までのご縁に心からの感謝を込めて、さようなら。

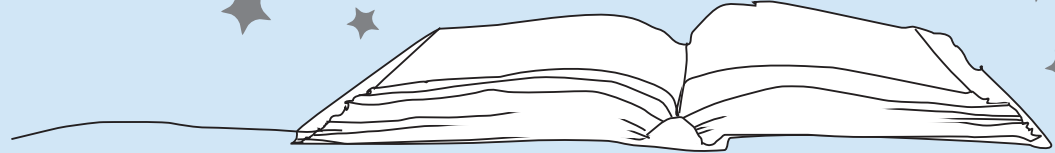
●SFCの学生へのメッセージ

皆さんの一人一人がこの世にたった一つのかけがえのない宝物です。常に己とは何かを自らに問いかけ、本当に自らが欲することを、誠意をもって、邪気のない目と心で、このSFCという環境を最大に味方につけて、自らの道を果敢に開拓してってください。またいつでも、どこでもお会いできると信じています。その瞬間まで一旦は、さようなら。

わたしの推薦図書

中西 泰人

連載 No.15



この文章を書いている二〇二四年の十二月現在、人工知能やロボットにまつわるニュースが毎日のように流れてきます。私たち人間が作り出した「知性」は、一体どのようなものでしょうか？人間の知性を模倣したものでしょうか？それとも人間の知性とは異なる、あるいは超越したものでしょうか？

私は二〇二四年の九月に、「スマートシティとキノコとブッダ—人間中心ではない—デザインの思考法」(中西泰人、石川初、本江正茂、ビー・エヌ・エヌ、二〇二四)という書籍を出版しました。この書籍は、AIやロボットが私たちの生活に浸透した未来の都市において、「私たちのどのような知性が引き出されるのか？」—そして私たちはどのような

知性を発揮すべきなのか？」を考えようとしたものです。タイトルの単語の組み合わせは奇抜に見えるかもしれませんが、近代的な都市という「人工環境」で生きる私たちの思考を意識的に相対化すべく、人類とは異なる知性の象徴であるキノコ(菌類)と、人類を超越した知性の象徴であるブッダを参照し、知のあり方・知性という視座から様々なものごとを多角的に考えようとした。異なる特性や異なるスケールの知性との対話・応答という視点から、人間だけが思考するという世界観から脱却しながら、AIやロボットが道具としてだけでなく他者や他種として私たちを取り囲むであろうこれからのスマートシティが引き出す知性の可能性について、様々な分野の専門家たちと議論してきました。この書籍では、その議論を通して筆者らが大事だと考えるようになった「発見的で開眼的な創造性」、そうした創造性が発揮されていると考えるデザインの実例、そしてそれを身に付けるための練習課題を紹介しました。

「Design」があります。この概念に関連する書籍として、存在論的デザインの視点から人工物の歴史を紐解いた『新版』我々は人間なのか？—デザインと人間をめぐる考古学的覚書き』(ビートルズ・コロミーナ、マーク・ウィグリー、ビー・エヌ・エヌ、二〇二三)の中で、著者らはこう述べています。

人工物の発明には不気味な鏡がついていて、人間は自身が作ったもののなかに、自身の可能性を見いだすことで人間になる。したがって、人間はただ道具を発明するわけではない。道具が人間を発明するのだ。(中略)道具と人間は互いを生み出しあっている。

この視点からすると、私たちが何かをデザインすると、そのデザインが私たちをデザインし返し、新しい「人間」を形作るという、連鎖のネットワークの中に人間は生きていることとなります。

存在論的デザインの源流とされる書籍『コンピュータと認知を理解する—人工知能の限界と新しい設計

我々は自分の行動を通じて世界を生成している。我々が言う変容は、技術的なものではなく、我々が周囲や自分自身を理解し、自分自身という存在であり続けるための、絶え間ない進化の過程なのである。

そして私たちは今、道具としてのコンピュータから他者や他種となる可能性を秘めたAIやロボットを通じて、人間とコンピュータとの関係問い直す時代を生きていると言えます。

新しい道具を作り出すことは、単に生活を便利にするだけではなく、「人間とは何なのか？」という根源的な問いを再考することでもあります。私たちは、パソコンを使いこなせるようになるとともに、漢字は読めるけど書けなくなり、手書きで文字を書いたり絵を描いたりする機会が大きく減りました。AIからの指示がずっと流れてくるヘッドマウントディスプレイを装着して授業を受ける人が現れるのはいつ頃でしょうか。三十年後には一緒に育ったロボットを連れて学校へ通う人がいて

もおかしくはないでしょう。黒曜石を尖らせて石器を作り狩猟をしていた古代の人間と未来の人間とでは、どのような共通点と相違点があるのでしょうか。そうした問いに挑む書籍として、『ホモ・デウス—テクノロジーとサピエンスの未来(上・下)』(ユヴァル・ノア・ハラリ、河出書房新社、二〇二二)があります。さらにそうした問いに答えを出す方法としても興味深い書籍として、『万葉人の技術』(渡辺茂、日本書籍、一九七八)と『人間らしさとは何か—生きる意味をさぐる人類学講義』(海部陽介、河出書房新社、二〇二二)があります。前者は入手が難しいかもしれませんが、私の恩師の恩師が書かれたものです。万葉集に収録されている和歌の中から技術に関する単語を抽出し、その時代の風景を技術という立場から読み直したものであり、研究方法の発想として驚きを覚えました。後者は、太陽や星を頼りにした古代の航海法と丸木船を使い、三万年前の私たちの祖先が台湾から琉球へ渡った航海を六年をかけた体当たりで再現した人類学者による書籍です。この三冊を対比させることは、「答えを出せなさ



中西 泰人
(なかにし・やすと)

環境情報学部教授。
専門は、UI/UX、HCI、HRI、
設計支援、創造活動支援。

新しい道具の登場とともに、人間の本性や行動に対する我々の意識は絶え間なく変化し、それがまた、新しい技術的發展につながる。デザインの過程は、我々の可能性の構造を生成する「ダンス」の一部なのである。(中略)存在論的デザインでは、単に何が作れるかを問う以上のことが行われている。我々は、自分に何ができるか、何になれるのかという、「自己」についての哲学的な問いを行っているのである。道具は行動の基本であり、

阿川尚之先生の訃報を受けたのはオンライン会議の最中だった。呆然とし、カメラをオフにした。会議の議論はただ耳を通り過ぎていった。何をすれば良いのだろうか、何ができるのだろうかと考え、数日が過ぎた。

三田キャンパスの常任理事室の窓は、朝の早い時間は強い日差しが入るのでブラインドを閉めている。昼近くになってブラインドを開けたら、ぱーっと黄色い銀杏の葉が窓いっぱいに広がっていた。「大丈夫だよ、土屋さん」と阿川先生が言ってくれているかのような感じがした。たぶん、阿川先生も同じこの窓から秋になると黄色い銀杏の葉を眺めていたに違いない。

いつのことだったか、なぜそんな話になったのか覚えていない。しかし、強く印象に残っている会話がある。「自分じゃなきやダメなんて思っちゃダメだよ。誰かがいなくなったら、別の誰かがやってくれるんだよ。私がいなくなったらSFCは続いていくんだよ。」

それはその通りだと思う。しかし、私は阿川先生を頼りにしていた。仕事のこと、私的なことも相談に乗ってくださった。

いろいろなところにも一緒した。たぶんハイライトの一つは、海上自衛隊の護衛艦いずもと一緒に乗船したことだろう。飛行機でシンガポールまで飛び、港に入っていたいずもに乗り込んだ。数日にわたって南シナ海での訓練を研究者仲間たちと一緒に見学した。士官用の大きな個室に泊まらせてもらい、朝から晩まで間に護衛艦での乗組員の姿を見ながら、海上自衛隊、米国海軍、日米関係、米國政治、その他いろいろなことを教えてもらった。

自衛隊や米軍は、見学に行くときよく帽子をくれる。それぞれの部隊や艦の名前、独自のシンボルなどが刺繍されている。SFCの常任理事室には、阿川先生がお願いして付けられた帽子を掛けるフックがたくさんある。そこに阿川先生はたくさん帽子を掛けていた。

ある日、テレビ番組の収録でお笑いタレント・爆笑問題の二人がその部屋

にやってきた。入るなり、「すげーな、これ。ちょうだいよ」と言われた阿川先生は、「えっ」という顔をして固まり、決して「いいよ」とは言わなかった。今、私は阿川先生のまねをして常任理事室のフックに帽子を掛けているが、私のコレクションでは全く足りず、野球チームの帽子などを掛けてもまだフックが余っている。

その番組では、爆笑問題に挑発されて、阿川先生が激昂する場面が番組の宣伝に使われた。テレビ番組はおもしろおかしく編集することがあるが、その一例だった。「なんであの番組に出たんですか」と聞くと、「学生を映してくれるっていうからさー。SFCの学生たちが頑張っているところを見せてくれたんだよ」とのこと。「こんなもん、やってられるか」が学部長・常任理事時代の阿川先生の口癖だったが、それでも学生のことをいつも真剣に考えておられた。

阿川先生と海上自衛隊を見学して知ったのは、「ボーフレ」だ。最初は何のことだ分からなかったが、すぐに「帽子を振れ」を省略して「帽振れー」と言っているのだと分かった。洋上でも陸上でも、別れ際に海上自衛隊の皆さんは整列し、帽子を取り、姿が見えなくなるまで振ってください。こちらもいただいたばかりの帽子を振って応える。

阿川先生が最後に書かれた文章の一つは、『アステイオン』第一〇一号（二〇二四年十一月）に掲載された「やめるということ『もうよか、まだよか』」だろう。その肩書きは、「慶應義塾大学名誉教授、著述家」になっている。二〇二二年には「アメリカ弁護士・著述家」という肩書きも使っておられたようだ。阿川先生は弁護士であり、大学教授でもあったが、一番ご本人がやりたかったことは文章を書くことであり、それが「著述家」というあまり使われない肩書きに現れているように思う。最後にお電話をいただいたのは八月二十四日だった。「この歳でも頼まれて文章を書くことがあって、なかなか良いって言ってもらえるんだよねえ」と仰っていたのを思い出す。

『アステイオン』の文章を読むと、すでにご自身の「やめどき」について覚悟をされていたようだ。とても潔い、阿川先生らしい文章だと思う。阿川先生に帽を振ってお別れの挨拶をしたい。



阿川 尚之

(あがわ・なおゆき)

1951年生まれ。慶應義塾大学法学部中退、ジョージタウン大学スクール・オブ・フォーリン・サービス並びにロースクール卒業。ソニー株式会社、米国法律事務所等の勤務を経て、1999年、慶應義塾大学総合政策学部にて教授として着任。その後、総合政策学部長、慶應義塾常任理事を歴任。2002年-2005年には在米日本国大使館で公使を務めた。

阿川先生の最終講義のページ→

(<https://gakkai.sfc.keio.ac.jp/archive/lecture/post-9.html>)



編集後記

オリンピック・パラリンピックの余韻が残る中、今号の特集は企画されました。つい最近まで、アルファ館の前に大会で活躍したSFC関係者の横断幕があり、毎日、選手たちの名前の下を通りながら登校していました。文字通り、見上げる存在であったアスリートの方々でしたが、取材を通して同じSFCの学生なのだと思えることもありました。この授業が面白かった。研究会でこんなことをしている。SFCの学生の活動は様々で、お互いが刺激を受けながら、やりたいことを全力でやるのがSFCの姿だと思います。

振り返ってみると、特集で取材させていただいた方々は、先生方含め皆さんアスリートでした。尾崎野乃香さんと対談していただいた野中葉先生が、SFCのアルティメットサークルで活躍され、世界大会に合計で4回出場されていたことも驚きでした。

新連載の「のぞき見ルーティン」は、本当に試行錯誤しながら完成させました。この連載が今後どのように続いていくのか未知数です。けれど、このような連載が生まれたご縁を大切にしながら、これからも先生方を身近に感じられる連載にしていきたいと願っています。

取材やご寄稿を引き受けていただいたたくさんの方々のご協力があって、発行することができました。この場をお借りして、深く感謝を申し上げます。

この79号が皆さんのお手元に届く頃には、SFCでも桜が咲いているでしょう。SFCに新たな風が吹く中で、多くの人に読んでいただけること、そして、この雑誌づくりの輪を広げられることを期待しています。

2025.2.18 編集長 吉松 野乃子

慶應SFC学会

発行人 黒田 裕樹 (会長 / 環境情報学部 教授)

担当理事 宮代 康文 (総合政策学部 准教授)

事務局 田坂 真美

編集長 吉松 野乃子 (総合政策学部 2年)

副編集長 藤田 叶子 (総合政策学部 3年)

岡田 奈和実 (総合政策学部 1年)

編集委員 工藤 美桜 (総合政策学部 4年)

東 史華 (総合政策学部 4年)

荒井 美海 (環境情報学部 3年)

福原 衣織 (総合政策学部 2年)

堀江 真咲 (総合政策学部 2年)

井庭 晴香 (環境情報学部 2年)

藤井 美来 (環境情報学部 2年)

多田 来希 (環境情報学部 1年)

野畑 六花 (環境情報学部 1年)

表紙 / 誌面デザイン

藤田 叶子 (総合政策学部 3年)

「のぞき見ルーティン」デザイン

野畑 六花 (環境情報学部 1年)

発行日 2025年3月13日

発行所 慶應SFC学会

〒252-0816 神奈川県藤沢市遠藤 5322

0466-49-3437

<http://gakkai.sfc.keio.ac.jp/>

keio-sfc-review@sfc.keio.ac.jp

無断転載・複製を禁じます。ご相談は慶應SFC学会までお寄せください。





KEIO SFC REVIEW No. 79

ISSN 1343-3318

発行所 / 慶應SFC学会

<http://gakkai.sfc.keio.ac.jp/>